

# 和田 四郎（わだ・しろう）

## 1、プロフィール

歌人。昭和 14 年「美籠」に入会し、稲垣浩に師事。22 年稲垣主宰の「国原」創刊に参加し同人として活躍。27 年「まひる野」に入会し窪田空穂、窪田章一郎に師事する。

<生没>

1915(大正4)年 12 月 15 日～1983(昭和 58)年1月 29 日

<代表作>

『和田四郎全歌集』

<青森との関わり>

上北郡七戸町生まれ。青森県の歌誌「美籠」「国原」に入会し、「七戸群青短歌会」の代表として、後進の育成。

## 2、作家解説

昭和6年に青森師範学校に入学し、短歌を作っていた父郭秋の影響を受けて、学校の文芸誌に短歌の投稿をはじめめる。師範学校卒業後七戸小学校の教員となる。14 年に青森県の歌誌「美籠」に入会し稲垣浩に師事する。その後戦争のため5年ほど中断するも、22 年稲垣浩の「国原」創刊に参加し、同人として活躍をする。

作歌意欲が旺盛な和田は、27 年に中央の歌誌「まひる野」に入会し、窪田空穂、窪田章一郎に師事する。以後「国原」「まひる野」への毎月の出詠を休むことなく作歌ひとすじに励まれた。青森県歌人懇話会副会長の加藤武が『和田四郎全歌集』の書評の中で、「彼は教え子を愛し、家族を愛し、同僚と誠心誠意でことに当たり、そういう歌で満ち満ちている。退職の年、文部大臣賞を受けることになる。まことに愛と誠の歌集である。若干抜いてみる。辞令書く機械とわれを鞭うちて僻地に赴く人の名を書く、その命糸ひくごとく伸ばし終え骸となれる顔のやさしさ、麻醉

いまだ醒めやらぬ耳に唇触れて励ましくれし言葉忘れつ」と述べている。また和田が指導主事のころ、国語科の指導法を教わった『和田四郎全歌集』の編集者古館千代志は、遺歌集の出版にあたりとして「和田先生の歌は、上北という風土にしっかりと根ざし、技巧的な作る歌ではなく、人間の生きざまを直視し、内面の真実追求と鋭い感性によって昇華された独特の歌風は、人間性に溢れた清冽なひびきとなって読む者の琴線に触れて止まない」と記している。

和田は教育家で、剣道にも優れ、50年に教育功勞により文部大臣賞を受賞された。「国原七戸支部」支部長、「七戸群青短歌会」代表、北奥羽短歌大会、上十三短歌大会の選者をされて、地域の短歌の普及と後進の育成に尽力された。その功績を物語る歌がある。平成4年上十三短歌大会の天位の歌。

三沢市笹原与幸の作品

「上十三歌会と聞けば和田四郎不死鳥となりて羽ばたく音す」

### 3、資料紹介

○『和田四郎全歌集』

図書

1993(平成5)年4月20日

215mm×155mm

昭和14年から57年までの全作品3,393首を5部に構成し年代順に収め、英子夫人によって発行された遺歌集。窪田章一郎の題簽と色紙、著者の近影と色紙、稲垣道と佐藤勇の序、英子夫人のあとがき、古館千代志の編集後記、略歴を掲載している。